

遊びの効用

(2001.5.7)



子ども達の世界から「遊び」、特に**集団生活での外遊び**がなくなり始めた頃から、不登校、いじめ、学力低下といった現象が現れ始めたように思います。大人にとって遊びは、労働や勉強といった「**課題**」と**対立するもの**として、無駄なもの、娯楽としてとらえますが、子ども、中でも幼児にとってはまさに学習そのもの「**生活**」**そのもの**であって、そこから多くのものを学習し、心身の発達課題を次々と達成し、成長、発達していきます。遊びの持つ効用(機能)としては次の事項が上げられます。

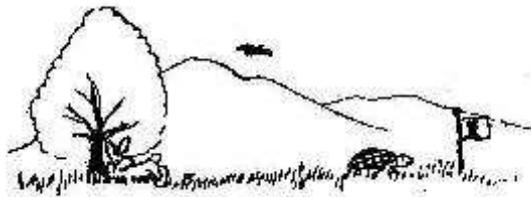
①身体的、運動的発達

体を動かして遊ぶことにより、体力を養い、健康を増進させます。運動能力(特に身体的調整力)を身につけます。

②社会性の発達

集団で遊ぶことにより、仲間意識を持ち、他人と関わり、その中で自分を安定させ、他人に対して心を開き、**積極的な感情**を持つようになります。仲間の中で、協調性や自制心、集団のルールを守る態度、自己主張、競争心などの**社会的適応力**を学んでいきます。これらの能力は、仲間集団の中での経験でしか学ぶことができません。仲間集団でのポジティブな経験がないと、他人に対して防衛的(敵対的)になり、できるだけ他人と関わりを持たないようになります。

その他に、③**知能の発達** ④**自発性、自主性の発達** ⑤**情緒の安定**などが挙げられますが、次回に続きます。



遊びの効用 その2

(2001.6.1)



先月に引き続き『遊び』について、述べさせていただきます。

いじめ、不登校、学級崩壊、学力低下、自己中心的で我儘な子の増加、といった現象が起きてきたのは、子ども達を勝手、気ままに、遊ばせてばかりいたからだ、と言う人がいます。しかし、この説には大いに反論したいと思います。子ども達の世界に**おかしな現象が現れ始めた時期**と、子ども達の遊び、特に**集団での外遊びが少なくなり始めた時期**が一致します。どう考えても遊ばせてばかりいたことが原因ではなく、反対に、集団での外遊びが減少していったことが原因だと思うのです。

そこで、子ども達にとって『遊び』とは何か、そして、遊びの持つ機能(効用)について、約束ごとを守る、人と関わる力といった社会性を中心に述べましたが、今月は**自主性、自発性**の獲得について述べたいと思います。**遊びは何より、自主性と自発性を特色とします**。遊びと言えるには、自分でテーマを決め、自分で修正し、自分で発展させていく、(あるいは止める) プロセスが、自由にできなければなりません。よく大人が指示し、誘導して子どもを動かし「○○遊び」と称している事がありますが、例えば子どもが自由に運動しているのは遊びだが、大人が指示して行う運動は遊びではありません。

子育ての目的は「自立」だと言われます。自分で考え、選択し、判断し、自分で決定し、自ら実行して、その結果について、決して他人のせいにならず自分で責任を負う。失敗したら失敗から学び、もう一度自分で考え・・・という**自立のプロセスは『遊び』の中で育ちます**。『遊び』は正にこのプロセス**のものなのです**。従って、良く遊ぶ子どもは、毎日このプロセスを繰り返すうちに、いつの間にか自己決定の能力に自信をもち、積極的で、行動力のある人格を形成していきます。やがて、親への依存から脱却して、一人前の社会人としての能力を身につけていきます。今、日本の教育界で叫ばれている【「生きる力」を育てる】というテーマに直結します。しかし、この能力は人が教えて育つことではありません。日々の『遊び』を通しての体験の中でこそ、自然に身につけていくことです。



遊びの効用 その3

(2001.7.1)



寒い冬の日の朝でした。A君が、眠そうに目をこすりながら登園して来ました。「A君おはよう！」と声をかけると、一瞥しただけで無言で私の前を通り過ぎようとしてました。私は「オイオイ、園長先生があいさつしているんだから、オハヨウぐらい言ってくれよ。眠そうな顔をして、朝顔洗って来たの？」と尋ねると、「こんなに寒いのに、顔なんか洗うわけないだろう」と言う。「朝顔を洗い、オハヨウゴザイマスとあいさつするのが人間の習慣なんだよ。朝、顔洗わなかったり、あいさつしないと、スッキリしない、気持ち悪だろう」と言う。「洗わなくとも気持ち悪くないもん！」と言って去って行きました。

しつけ、生活習慣は、そのことがつくことにより、**社会生活がスムーズに送れるようになるためのもの**です。決して号令をかけたり、命令をしてやらせることはありません。何故なら、大人の命令、声かけがなくなった時には、行動できなくなるからです。良い生活習慣が自然に身につについて、意識しなくともできるようになることが大切です。

しつけの基本は、第一に**良いモデルがあること**です。「親の言うようには育たないが、親のするように育つ」と言うでしょう。だからみんな大人になると、親と全く同じような話し方をします。先生や保護者が良いモデルとなって、明るく、気持ちの良いあいさつを続けていると、子ども達は、大人を見て学習します。

第二に、**繰り返し、繰り返し続けること**です。初めはできなくとも、あいさつを投げかけて、決して強要したりせず、「あいさつしてよ」と声をかけ続け、そして、あいさつが返って来た時に、大げさに「〇〇ちゃん、あいさつしてくれた。ワア、うれしい。今朝はとても気持ちいいナ！」と言ってやり、そして繰り返し、繰り返しあいさつを続けることです。

第三に「〇〇ちゃんはいさつが上手でとても気持ちいいね」と、**その行動をいつも誉めてあげる**ことです。こうして、意識しなくとも自然に(無意識に)良い行動をするようになります。

さあ、今日からみんなで、明るく、気持ちの良いあいさつをしましょう。

理性と社会性を育てる

(2001.8.1)



この夏も、常軌を逸した暴力事件、幼児虐待が続き、滅入ってしまいました。そんな折、会議のため高速バスに乗って東京へ出掛けました。バスは混雑していました。後の方に進むと、オヘソ丸出し、見事な金髪、お目々びっくり、ギラギラ化粧のオネエさんが、横に化粧バックを置いて2人分を占領していました。しばらくすると、化粧品の沢山入った化粧バックを開け、堂々と化粧を始めました。私は通路を挟んだ窓側の席に座り、啞然としながらチラチラと横目で観察していました。化粧物のような化粧を終えると、突然、スプレーを取り出し、両脇の下と胸めがけて「プシュー」とやり始めました。車内に白い煙が立ち込め、化粧品の臭いが充満しました。しかし、誰も何も言いませんでした。私は、隣に座っている人越しに、「君、車内でスプレーは迷惑だよ。化粧だって良い事ではないよ」と注意しました。すると彼女は何も言わず、険しい目つきで一瞬私を睨みつけ、フンといった仕草で、声を立てずに口を動かしたのです。口の動きからして、確かに言いました。「バカヤロー、クソジジイ」と。

又、あるホテルの朝食バイキングでのことでした。隣席に座った若いカップルが、山盛りの食べ物を残して、席を立って行きました。お金さえ払えば、勿体無いことをしてもいい良いわけありません。加減して、必要な分量だけ取って、残さないようにするのがマナーであるし、社会のルールです。これらは、前記の社会で起きている現象と同根の問題であると思います。

先日読んだ本の中に、脳のことについての記述がありました。感情を適切に抑えて、相手の気持をくみ、社会の中で自分の置かれた状況を知る、つまり**社会性や理性をはぐくむ働きをするのが、前頭連合野**という部分だそうです。その前頭連合野というのは、額の内側にある部分で、他の哺乳類ではほとんどないに等しいほど未発達です。人類と枝分かれしたチンパンジーの遺伝子は、我々と98%同じですが、チンパンジーでも前頭連合野はヒトの6分の1、約70gしかありません。ヒトの進化とは、前頭連合野の発達と言ってもいいのです。そして**この前頭葉は、幼児期の仲間との"遊び"が不足すると、よく機能しなくなる**と言われます。サルの実験で、2歳位まで仲間から隔離して育てると、元の集団に戻そうとしても、喧嘩が絶えなかったり、逆に引きこもってしまったり、社会性に欠け集団生活ができなくなります。調べてみると、前頭連合野を活性化する脳内物質の分泌が、他のサルに比べ少ないそうです。サルの2歳までは、人間の幼児期に当たります。人間の場合も、**前頭葉の働きを良くするには、色々な年齢の子が、集団で戸外でよく遊ぶ事が必要である**と思います。カッとしてすぐに切れない子を育てるためには、また、自分を抑えて理性的、社会的な行動ができる子を育てるには、家の中で一人でテレビゲームばかりしてはダメです。理性や社会性を育てるには、"集団の遊び"の中で、どうしたらうまく付き合えるか、実際に体験できる環境を保障してやらなければなりません。実際にケンカしてみなければ、相手への手加減や、仲良くするにはどうしたら良いかわかりません。私達は、**ヒトが人間として成長、発達することはどういうことか**、もっと考えなければなりません。

思考したり、想像したりすることこそ、知的活動の中心であると思います。暗記ばかりの知的教育に偏りすぎていたのではないのでしょうか？

やれば出来るようになる

(2001.9.10)



ハンディのあるAちゃんのお母さんから、『出来ても出来なくても同じチャンスを与えて下さい』、と言われた。誕生日会の際に、まだ言葉がはっきりと言えないAちゃんが、自己紹介をする際に、担任がAちゃんに代わっていきなり自己紹介をしてしまったことに対してのご指摘であった。誕生会の前に、何回かクラスでリハーサルをした時に、Aちゃんが一言も話せず立ち往生してしまったので、担任はAちゃんが困らないように、先回りしてしまったのであった。

私にも、以前似たような体験がある。子ども達とボール投げを始めたところ、次から次へと子ども達が入って来た。すると、順番に並んだ子ども達の最後に、片腕がないBちゃんが加わった。ドッチボールのボールである。誰もが両手で抱えるように受け取っていた。私は、一瞬、困った。片手では取れるはずがない。それでも、私は彼が満足するまで、何度もボールを投げた。ボールは何度も跳ね返った。そして突然彼はガッチリと受け止めた。右手とあごと左ひざで、しっかりとボールを受け止めた。子ども達から拍手が上がった。「スゴイ、カッコいい！」という声が上がった。Bちゃんは胸をはった。私は、決して取れないだろうと思った自分を、ひどく恥ずかしく情けなく感じた。

子ども達には、今出来なくても、できない、ということはない。初めから歩ける子はいない。何度も何度も転んで、歩けるようになる。そして、歩けるようになって、何度も転んで、転ばなくなる。**何事もやってみなければ出来るようにはならない。**

私達は、子どもが何事にもチャレンジするように励まし、できなかった時は、**一緒に悔しがり**、もう一度チャレンジする勇気を与え、できた時は**一緒に喜び**、誉めて、達成感を与え、有能感を育てなければならぬ。



みんな一緒がいい時

(2001.10.1)



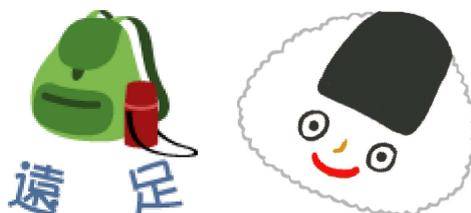
私達は、個性や価値観の多様性を尊重すると言っているが、みんなと同じでないと不安になったり、落ち着かなくなったりしがちです。だから、いつもみんなと同じかどうか、揃っているかどうか心配します。そして、集団が整っていることを重視します。集団生活のルールは守らなければならないこと、自分勝手な我侭は許されないことは当然のこととして、揃っているか、整っているかより、一人一人が自己充実しているか、自己発揮しているかこそ、大切なことだと思います。だから、みんな同じでなくていいと思うのです。しかし、みんな一緒の方がいい時もあります。

昨年のことですが、快晴に恵まれ、まさに登山日和の日に、幼稚園では、筑波登山に出掛けました。みんなでお励まし合って登りました。ゆっくり景色を眺めながら登りました。途中パラパラと雨が降ったりしましたが、濡れるというほどのこともなく、眼下に広がる関東平野を何度も望むことができました。山頂ではまさに360度、かすみたなびく広々と開けた景色に、息を呑み、歓声を上げ、バンザイをしました。しかし、元気のいいグループは先を争ってドンドン登るので、お弁当を食べる場所に着く頃には、先頭集団と最後尾とでは、かなりの時間の開きができてしまいます。着くとすぐに、「飲み物は飲んでいいよ」と言いました。

しばらくすると、「お弁当を食べていい？」と何度も聞いてきました。前年も同じことを言ったのに、先生からも「待っていると、お弁当を食べるのが遅れて出発が遅れてしまうので、先に食べさせましょう」との声がありました。早く登った子は、体調も良いので、食べるのも早いのに、遅れて来た子は、疲れきっているのに、食べるのも遅くなり、ますます遅れてしまうことになります。時間も早いし、寒くて待ち切れないという状況でもありませんでした。私は、「一緒に登ったふたばの仲間が、早くみんなに追いつこうと、今一生懸命に登っているから、お腹が空いて待っているのが辛いのも分かるけど、もう少し待っていてくれる？ 調子が悪くて、苦しみながら登っている子も、足が弱くて、フラフラしながら頑張っている子もいるんだ。待ってあげようよ。」と言うと、「ウン、わかった。待っている」と言ってくれました。

私は、いま来た道を迎えに戻りました。山道を歩いて来る大きなT先生と、ハンディのある小さなTちゃんの姿が現れました。Tちゃんに手を差し出すと、それを振り払いました。最後まで自分の足で歩く、という意志表示でした。待っていた子ども達が総出で迎え「Tちゃんガンバレ」コールが上がりました。Tちゃんはオリンピックのマラソン最終走者のようにヨロヨロしながら両手を上げて答えました。

そして“みんなと一緒に”おにぎりを食べました。



来た時よりも、きれいにして帰ろう！

(2001.11.1)



運動会も終わり、少しせいせいとした気分になった秋晴れのすがすがしい朝、子ども達を門で迎えていたところ、A君が「オハヨウ！」と私にタッチして通り過ぎました。そして、すぐに引き返して来て、私の顔をのぞき込み、「今日は遊べる？」と尋ねました。私は仕事(デスクワーク・・・子どもと遊ぶのも仕事なのだが・・・)がたくさん溜まっていることなどすっかり忘れ、「勿論！遊ぼう」と答えてしまいました。そのことを聞きつけた年少の先生が、「園長先生、今日は、一日子ども達と遊んでくれるんですか？」とやって来ました。そして、川のむこうにある、ふたば山(市が勝手に巢立ち山と命名している)に遊びに行きました。

バスを降り、あたりを見廻し、私はポー然とした後、次第に怒りが込み上げてきました。そこはまさに、「ゴミの山」でした。弁当の食べカス、ビニール袋、空缶、空ビン、花火の燃えカス、あちこちに犬のフン、ものすごいゴミだらけの公園でした。ゴミの中で、親子づれの子どもが何人か遊んでいましたが、気にならない様子でした。子どもは環境から、学習します。こんな環境の中では、子ども達はゴミは捨てても良いのだと思い込み、学習してしまいます。私は、子ども達を集め、危険防止の注意をしっかりと伝えた後に、「みんなが使う道路や公園は、来た時よりもっときれいにして帰らなくてははいけないのだよ。だから、ゴミを捨てるのは勿論ダメだけれど、落ちているゴミを拾わないのもダメなんだよ」と話しました。土手スベリをしたり、鬼ごっこをしたりして、汗びっしょりになって遊んだ後、みんなでいっぱいゴミを拾って、幼稚園に持ち返りました。私と一緒にゴミを拾っていた数人の子ども達が、怒りを込めて「こんなに、ゴミを捨てるなんて悪い人達だね」と言いました。私は「そうだね、ゴミを捨てる奴は悪い奴だ。みんなはゴミを拾ってくれるから、良い人だね」と言うと、「僕は絶対にゴミを捨てない」と言いました。ふたばっ子は、ゴミを捨てる側の人間ではなく、拾う側の人間になると思います。

2日後は、取手と北竜台の筑波登山の日でした。「来た時よりもきれいにして帰ろう！」を合言葉にして、先生方はみんなゴミ袋を腰に付け、子ども達とゴミを拾いながら、山登りをしました。お弁当を食べ終り、下山をする時に、I先生が、子ども達に呼びかけた言葉が印象的でした。「みんな回りを見廻してごらん。来た時より、お山はきれいになったかな・・・、お山が喜んでいるかな・・・」。遠足のねらいの一つに、必ず「挙げられるもの」があります。公共の場でのマナーを身につける、社会性を育てる、といったことですが、他の人の迷惑を構わず、混雑している中で集合写真を撮ったり、狭い道に座って通行の妨害をしたり、人を押しつけて登っている姿を見掛けてきました。ふたばっ子は、ゴミを拾い、ゆっくり景色をながめ、美しいマナーで筑波登山をして、達成感を十分に味わいました。



自由と遊びの大切さ

(2001.12.1)



「学級崩壊の原因」は、幼稚園が子ども達を遊ばせてばかりいるからだ。個性や主体性を重視しすぎ、子ども達を自由に勝手気ままにやらせすぎたからだ。幼稚園は十分に反省しなければならない」と、言う。今の子ども達の現実の生活を全く知らないか、無視した論議である。子ども達が遊びたいだけ遊べる（素晴らしい？）幼稚園が、日本のどこにあると言うのだろう。一人一人の個性や主体性を、重視しすぎた幼稚園がどこにあると言うのだろう。

私達、幼稚園関係者が反省しなければならないのは、気付かない内に少しずつ、子ども達から自由を奪っていたことである。主体性、個性と掛け声ばかりで、実は全て親や教師の指示、命令通りに素直（？）に動く子を「良い子」と評価していたのである。（実は大人に都合の「良い子」でしかないのである。）

最近の子ども達の中で目立つ傾向の第一は、「〇〇していい？」「どうしたらいいですか？」と、いつも指示、命令を待っている子が多いことである。積極的に自分で何もできず、突発的なことが起こると、全く対応できなくなる。二つ目は、いつもおどおどして、人間関係に非常に神経質で用心深い。友達との関係がまずくなると、うまく人間関係を修復できずパニックになってしまう。三つ目は、「なに、なに？どうして、スゲー、やらせて」と言った声が聞かれなくなり、知らないことでも「それ、知ってる」「やったことある」と言って、何事にも興味、関心を示さず、しらけている。又、失敗することを非常に恐れる。たとえばやり始めても、すぐに「疲れた、もうやめる。」と続かない。更に、集団のルールが守れない、我まま、自己中心的等々...そして、こうなったのは、遊ばせてばかりいるからだと言う。

反対である。十分に遊び込んでいれば、こんな状況にはならないのである。遊びは主体的、自主的なものである。大人に命令され、指示されて行なうものではない。自分で決めて、自分で考え、夢中になってやれるものだ。だから、あの炎天下、焼け付くような庭で水の入ったバケツを持って、砂場と水道を何度も往復できるのだ。指示を待ってやれることではない。そして、やっと造った砂の山とトンネルが崩れても、カンシャクを起こして、人のせいなんかにしな。自分で責任を持って、どうしたら崩れないようにできるか、考え、再び挑戦する。遊びを中心とする集団生活の中で、友達と衝突（ケンカ）をしたり、うまく関わることができずに葛藤したり、仲良くなったりして、一緒に遊ぶことの楽しさを味わいながら、人の痛みや辛さを知り、自分を律すること(我慢)や集団のルールを学び、友達を大切にすることを学んでいくのである。



【追伸】

11月の園便りに、ゴミ拾いのことを載せましたところ、各園から沢山の反響がありました。

『ペイ・イット・フォワード』という映画を思い出しました。少年が人のために行動し、そのお礼を申し出られた時に「私にお礼して下さる分を他の人にしてあげて下さい。そして、その人がまた、他の人の

ためにする様に伝えて下さい。」と言い、善意の輪がどんどん広がっていく、といったストーリーでした。

あるお母さんからの嬉しいお便りを一つだけご紹介致します。【筑波登山から帰って来た日の夕刻、子どもと一緒にスーパーに出かけました。途中、道路にゴミが落ちているのを見つけた息子が、さっとゴミを拾い「道路にゴミを捨ててはいけないんだよね。道路はみんなのものだから、ゴミを拾わなくっちゃ！」と言いました。お母さんはびっくりして、そして感動してしまったとのこと。そして、後日、11月の園便りを読んで、これだったのかと合点がいき、**幼稚園で本当の人間生活を学んでいるのだ**なと思いました。】そして、お母さんも、お父さんも、ゴミを拾うようになったとのことでした。